

社會學の現代的課題

——一つの覺書——

日 高 六 郎

コール (D. H. Cole) を編集者とするハッチンソズ・ユニヴァーシティー・ライブラリーのなかに、ノッティンガム大學の教授スプロット (W. J. H. Spott) が「社會學」を書いている。これはこの文庫の性質上、素人わかりのする入門書にすぎないが、現在の社會學の關心の方向を、たくみにとらえている點では、ホーム・ユニヴァーシティー・ライブラリーのなかの、ジンスバークの「社會學」よりもすぐれている。

私はこれを手がかりに、現在の日本の社會學に恐らくは要請されているのではないかと思われる課題について、考えてみたい。

スプロットは、多くの社會學の概論書がそうであるように、まず「社會學とはなにか」を問うことから始めている。たゞしスプロット自身はそれには答えていない。

社會學には周知のように泥沼がある。すなわち社會學の學問的性格をめぐる堂々めぐりである、それらの社會學學問論には、A、B、C、……の社會學の體系にたいする比較や批判を含んでいることが多い。しかし從來それらの批判や比較には、次のような一つの盲點がつきまとつていたように思われる。すなわちそれらは、A、B、C、……の

社會學體系の論理的な整備と首尾一貫性を問題とするだけで、「數多くの」社會學が成立した歴史的背景、もしあえてそうすることが許されるならば、そのイデオロギイ的背景を無視しているばあいが、かなりあつたことである。もし從來のさまざまな社會學體系が成立した歴史的背景がもつと明らかにされるならば、社會學に負わされている現代的課題、あるいはその宿命も、いくらか理解できるようになるのではなからうか。

それはともかくスプロットは、かれ自身の見解は背後にかくし、たゞ從來の社會學史のなかで、もつとも有力であつたと思われる三つの傾向について、略述している。

かれによれば、その三つの傾向とは次の通りである。第一には、「人間の社會的行動」から出發するもの、第二には、「人間の諸社會」^{ソシエティズ}を研究するもの、第三には「人間社會」^{ソシエティ}を研究するもの。

私は先まわりして、この三つの立場を、私自身の言葉に翻譯しておこう。すなわち、個人、集團、および全體社會（その極限は人類社會）。

かれは第一の立場について説明するさいに、まずアメリカの文化人類學者リントンの、「社會とは、個人の組織された集團であり、文化とは、けつきよく社會のメンバーの組織された反覆的反應以上のものではない」という言葉を引いている。しかしかれが第一の立場として考えているのは、マックス・ウェーバー、ジューメル、フィアカント、ヴィーゼなどであり、とくにドイツ形式社會學派の人たちである。ウェーバーおよびジューメルの「社會學論」についてのごく簡単なスケッチ。もちろんそれはウェーバーにおける微分的な「社會的行爲」の分析が、あの「宗教社會學」のなかで見られるような、歴史主義的であると同時に比較社會學的な、個性と類型とを統一する天才的構想にまで發展

するようなことがらは、全く黙殺しているし、またジューメル社會學についても、ジューメルの近代人の運命——分化と解放、自由と孤獨——にたいする深い洞察を無視している。こうしてスプロットの敘述は、その短かさを割引しても、せいぜいウェーバーとジューメルのアングロ・サクソン版にとどまつてゐることはやむを得ない。しかしそれはそれとして、すべての社會現象を、社會の成員としての個人の行動、思考、感情にまでさかのぼつて分析する立場を、社會學の一つの有力な傾向としてみとめた點は正しい。たゞ残念なことは、スプロットが最近アメリカで發達しつつあるパースナリティ分析については、ウェーバーのいわゆる「主觀的意味」のほかに、行爲者の「無意識的な意圖」にも十分注意を拂われなければならないことを、指摘するだけにとどまつてゐることである。

しかし現實の社會的行動、現實の社會關係の分析に終始するこの立場に限界はないであらうか。

第一に、多くの人々の個人的行動が集積されると、それらの人々が全く豫想もしなかつた社會的結果を導きだすこと。たとえば、インフレーション。これはしばしばマルクス主義者が指摘する通りである。

第二に、現實の社會的行動、社會的關係の背後には、たゞその場限りのそれらの行動や關係よりは、もつと恒久的な、社會的權利と義務との體系、スプロットのいわゆる「社會的期待の超越的體系」が支配していること。この點はデュルケーム學派の主張する通りである。

第三に、形式社會學的傾向については、いわゆる人間幾何學的な社會的相互作用の形式も、それが含んでゐる（ジューメルのいわゆる）内容に應じて、全くことなつた意味をもつにいたること。たとえば教師と生徒、ローマ的家長と家族員、封建時代の領主と農奴等の人間關係を、たゞ支配と服従という圖式だけで片づけることは不可能である。

このような限界を補足するためにも、第二の立場が重要となってくる。すなわち人間諸社会ソサエティス、あるいは集團の研究に重點をおく社會學である。

さてスプロットは、このような立場の社會學を解説するよりも、このような社會學によつてとらえられる集團とはどのようなものであるかを、説明するのに忙しい。たとえば、家族、學校、村落、労働組合、クラブなどの組織的集團にたいして、階級、年令集團、などの「準集團」をどのように考えるか、など。あるいは集團を分類する六つばかりの規準が示される。一般的には、この集團の研究は、(I)全體としての社會集團の研究と、(II)その特殊な一側面の研究とにわけられる。

注目すべきことは、こゝであげられている具體的な研究が、ほとんど英米兩國に偏していることである。ことにアメリカにおける研究が数多い。マーガレット・ミードの *The American Character*、(ミードにつづてはその他多くの未開社會の研究があげられよう) ベネディクトの *Chrysanthemum and Sword*、リンンの *Middletown*、デイヴィスおよびガードナーの *Deep-South*、ウエストの *Plainville, U. S. A.*、ヒンリーの *A Japanese Village*、メジャーの *The Gang*、ワームスの *The Ghetto*、ウォーナーの *Yankee City*、など。しかしこのような研究が生れてきた社會的背景については、スプロットはふれていない。

最後に第三の傾向として、「人類社會の研究としての社會學」が登場する。

まずウエスターマーク、デュルケム、マックス・ウェーバーのように、ある特定の社會にだけ關心を集中せず、廣く比較社會學的な立場になつ研究。しかし、さらに進んでは、「全體としての人類社會の發展における一般の原理」

を追求しようとする人々の名前があげられる。コント、マルクス、トインビーの「歴史の研究」、ホップハウスなど。スプロットはそれらについてごく簡単な説明しか加えていないが、しかしこの立場を全く否定しているわけではない。さてスプロットが以上のように、社會學を三つの代表的な傾向において考えたことから、われわれは自由に多くの暗示をうけとることができる。

その實際の意圖がどのようなものであれ、一般に科學はある社會における現實的な課題の解決と密接な關係をもっている。とくに社會科學の場合には、實踐的問題の解決という、社會的な期待——もちろんその背景には、それをささえる現實的な集團の壓力、たとえば支配階級の、あるいは被支配階級の要求が潜んでいる——をはなれては、その科學の學問的性格をとらえることは不可能である。もちろん科學者は、ときには主として論理的あるいは知的な興味に導かれて、かれの對象にたちむかうこともある。多くの科學者はまさにそのようであることを自負しているかも知れない。ある意味ではそれも可能である。たゞそのような場合、もしかれの仕事がどこかの一點で現實的實踐的關心と鋭く切りむすばないならば、かれの仕事は永續的な影響力をあたえることはできない。

コント風の社會學と、ジムメル社會學と、あるいは現在のアメリカ社會學とを比較して、社會學の對象や方法の混亂を指摘することは、まことに簡單である。しかしもしそれぞれの社會學が成立したときの、イデオロギイ的意圖と社會的期待とに注意すれば、それらがまったく異質的な形の社會學となつたことは、むしろ當然のことであろう。

コント社會學がフランス大革命後、ようやくその内的な矛盾を暴露しかけたフランス市民社會についての危機意識

から出發したことはこゝで改めて指摘するまでもない。古い信仰はすでに破壊され、人類はその物質生活において新しい指導者を求めている。長い間の恐るべき激動によつてヨーロッパ社會はより動かされた。しかも新しい確固とした基礎の上にたつべき新社會はまだ完成されていない。精神上的の指導者である科學者は、政治學を嚴密な科學に改造しなければならず、世俗的な産業上の指導者たちはこの政治理論を社會に實現しなければならぬ。これがコント自身の理想であつたが、科學者と産業指導者（新興ブルジョアジイ）との握手とは、まさに時代が期待しようとしていたところでもあつたろう。コントの社會學に指摘される奇妙な矛盾、すなわち進歩的側面と反動的側面との結びつきも、當時としては單なる矛盾ではなくて、まさに一つの社會的要請であつたにちがいない。

十九世紀は、コントのほかにも社會的認識を組織化しようとする幾人かの大體系家を生みだした。たとえばヘーゲルやマルクスなど。もちろんかれらを社會學者のなかに數えいれることができるかどうかには異論があるとしても、さてコント的な大規模な體系的「社會學」は、現在では、ことにアメリカにおいては、一種の形而上學的企圖として、見すてられている。それらは經驗的に實證できる科學の枠からはみ出ていると考えられている。

もちろんアメリカ社會に解決を必要とする社會的問題が缺けているわけではない。またその内部の社會的矛盾が自覺されていないわけではない。しかしそれはアメリカという巨大な社會のなかの部分的疾患であつて、アメリカ社會それ自體の疾患ではない。アメリカをつむぎは資本主義と機械主義であり、そこで生活する個人の價値の規準は、自由と競争とであり、それをつらぬく原理はデモクラシイである。そして原理としてのデモクラシイ自體は問題となるどころか、むしろ常に問題解決のためのほとんど固定的な方法となつてゐる。その限りではアメリカ人は、コント

が求め、マルクスが求めたような新しい原理を必要としない。コント的社會學が非科學的であり、非經驗的であるというより、コント的要求をアメリカの社會學者はまだ經驗していないのである。

アメリカの社會學が社會的要求との結びつきにおいて、きわめて實踐的であり、プラグマティックであるとしても、問題は部分集團のなかで、あるいは部分集團と部分集團とのあいだで、あるいは部分集團を全體社會へ適應させることによって、解決できるものと豫想され、事實また解決されている。たとえば、アメリカで最近とくに盛んになつてきている、メイヨー一派の産業社會學（これはスプロットも紹介している）も、まさにこのようなオブテイミズムにさへえられた研究であり、しかも現實に若干の問題を解決する武器となつてゐる。産業社會學は、たとえばウエスタン・エレクトリックの一工場の生産性を高めることに貢獻したが、それは同時にアメリカの資本主義そのものの繁榮に奉仕したのであり、この場合、部分と全體とのあいだにはとりたてゝ大きな問題は存在しないのである。

一般に人間的な問題については、窮極的な解決というようなものは存在しない。しかし問題解決の方法について、最小限度の、あるいは最大限度の目安は存在している。もちろんそれは相對的に常に動搖してをり、そのため社會科學の關心はつねに變動してやまないものである。問題解決のための方法は、實に個人の內的態度（現實からの逃避、諦め）から全體社會の秩序の根本的な變革——革命——にまで到る。しかもその革命も一國內だけの問題ではなく、ヨーロッパ全體の、アジア全體の、あるいは世界全體の場にまでひろげることができる。

こゝで注意しなければならないのは、問題解決の方法の場合は、必ずしも小さな局面から大きな局面へ單純にひろがるものではないということである。たとえば、個人の次元で解決できない問題が集團の次元で解決でき、集團の次元

で解決できない問題が、全體社會の次元で解決できるとは限らない。反對に全體社會の次元で解決できない問題が個人の次元で解決することができる場合もある。たとえばきわめて特殊な個人的問題は、全體社會の變革や改造によつてすぐに解決することはできず、かえつてごく小範圍の第一次集團——たとえば家族のなかで解決できることもある。あるいは集團の問題（たとえば工場生産の能率）を、その集團に屬する成員のバースナリティに對する働きかけという次元で解決することも可能である。このことは、逆にいえば、問題を解決するための廣狹さまざまな社會的場は、問題の性格に應じて、それぞれの限界をもつてゐるということにもなる。

すでに述べたように、スプロットは個人の社會的行動を出發點とする社會學は、個々の行動とは全く質的にことなつた意味をもつ社會現象を説明できないといつて、その限界を指摘している。もつともし方法的な可能性をおしつめてゆくならば、ちようどマルクスが資本主義社會の全機構を商品の分析からはじめたのと同じように、すべての集團現象を個人の微分的な社會的行動によつて分析することも可能であるかも知れない。その行動をさらに分析すれば、それは欲求↓努力（手段の體系）↓欲求の充足（あるいは不充足）としてとらえることもできよう。集團とは、この立場からは、欲求と社會的期待（これも結局は、欲求する主體にたいする他者の欲求の集積に分解できる）とのダイナミックな交錯と考えることもできよう。しかしそれは分析の可能性を示すだけで、ちようどマルクスが商品の分析から出發したとはいへ、社會的變革の過程、たとえば革命を、商品の言葉で説明しなかつたように、社會現象のすべてを個人的な社會的行動によつて説明することは不便である。不便であるということは、實は實踐的な問題解決の場として、すでに個人の欲求とはことなつた次元の問題がはじまりつゝあることを暗示している。

こうして解決の方法の差異によつて、さまざまな社會學の體系の差異を説明することができる。コント社會學においては、(その内容はちがつているが、形式的にはマルクシズムも同様である)全體社會は變化するもの、あるいは變化せしめなければならないものと考えられているのに對し、アメリカ社會學の場合には、全體社會の枠は、原理的にはむしろ不動のものと予想されているのである。

日本の場合、今後の社會學の方向はどこに求めらるであらうか。われわれのもとでは、全體社會の危機意識が社會科學に對する關心をよび起させるもつとも強力なテコとなつていた。問題を部分的に、特定の小集團のなかに限つて解決するには、外部からの壓力があまりに巨大でありすぎる。たとえば一工場の問題は、簡單に一工場の内部だけで解決できない。それは日本資本主義の問題から解放されることも、二つの世界の國際的對立の影響から免れることもできない。こゝにアメリカではすでに前世紀の遺物と考えられているようなマルクシズム理論が、いまなお多くの社會科學者や社會學者をとらえてはなさない現實的根據がある。もし今後もわが國では部分社會の問題が、つねに、全體社會の場にくいこんで、そこで解決されなければならないとすれば、社會學者はそれに應じて全體社會との對決をくりかえし要請されるにちがいない。

もちろんこのことは、日本資本主義の一般的な危機という、ある意味では退屈なテーマを、社會學者もくりかえさなければならぬということの意味しない。このことだけに限つても、日本ばかりでなく、いわゆるマス・ソサエティと名づけられる、ある程度近代化された全體社會をとりあつかう場合には、資本主義制度、あるいは社會主義制度という規準とは別に、もう一つの導きの糸が必要であるように考えられる。それはいまかりに、機械主義時代の問題

と名づけてもよいであろう。このことはすでに清水幾太郎氏が指摘した通りであるが、機械主義は、資本主義と社會主義とを通じて、その双方に見られる一つの現代的な文化型式として考えなければならぬ。もし機械時代の誕生がほぼ産業革命時代にあたるとすれば、機械時代は資本主義よりも遅れて登場したのであり、同時にそれは資本主義の死滅をのりこえて、次の時代にも生きつづける予定のものである。この機械主義は、人間と自然との關係においては機械による大量生産方式を生み出し、人間と人間との關係においては、巨大なマス・ソサエティの成立を可能にするマス・コミュニケーションを成立させたのである。

しかし近代的な全體社會の根本的な特色を二三のスローガンで片づけることが、全體社會の場のなかで社會現象をとらえることではない。たゞ部分集團の問題か、それが屬している全體社會の影響力をぬきにしては、到底把握することも、解決することもできないということを自覺することが必要なのである。たとえば官僚組織を一つの例として考えてみよう。それは單に専門的な法律知識や行政手続きをこゝろえた一群の人々の集團ではない。それは全體社會のなかで特定の役割をあたえられている。もし全體社會が資本主義的である限りは、それは階級的利害關係をぬきにしては考えられず、また機械主義的である限りにおいては、合法的な枠と通路のなかで専門的な行政機能を遂行する一種の管理者の役割を果している。この後半の面では、ちようど機械主義が、アメリカとソ連において共通であるように、官僚組織にも二つの世界をこえた共通の性格を見つけ出すことができる。たとえば官僚組織については、次のような周知の問題がある。すなわち官僚に接觸する一般民衆は、ごく個人的具體的な要求を持ちこんでくるが、官僚はこれを一般的合法的な方式のなかで處理している。こゝに摩擦と衝突が起る。これは實は機械時代の進展にと

もなう一般的な問題の一つの表現にすぎない。個人の欲求は原始的とでもいつてよいような單純なものにとゞまつてゐるのに、それを充足させるための手段の體系は、ほとんど個人の能力では見透しがたいような複雑な社會機構の重層のなかにかくされている。このように、ちやうど資本主義制度の性格が官僚組織のなかに表現されるのと同様に、機械主義制度の性格もあらゆる社會集團のなかに反映するのである。

以上はごく簡單な一、二の例にすぎない。社會學ばかりでなく一般に科學が時代の要請に制約されていることは、その恥辱ではなくてむしろ光榮であるといつてよい。時代の要請がことなる場合、どのようにことなつた社會學が成立し得るかは、すでにコント的社會學とアメリカ社會學との對比で述べた通りである。現在日本の社會學はアメリカ社會學の強力な影響のもとにおかれている。しかしアメリカ社會學を、一つの榮養素として吸収しようとするならば、わが國における現在の時代的要請をはつきり自覺する必要がある。それなしにはアメリカ社會學は、われわれにとつて大きなプラスとはならないにちがいない。